ねがい

いつでも　どこでも　ホスピスケアを!!

第49号

発　行
群馬ホスピスケア研究会
責任者　土　屋　徳　昭
事務局　高崎市北久保町10-9
（吉本宅）
☎·FAX　027（353）1341
e-mail　ttn32hi253@mx9.ttcn.ne.jp
〃　〃　027（323）5824
e-mail　SNB32318@nifty.com
印　刷　㈲あさを社
高崎市泉町1854−59
☎　027−327−1161

市民ホスピスセミナー　2002. 3. 30（土）

半円の闇 ～生きる意味を考える

関 アツ子さん 講演会

＊病気の友と対等な付き合い＊

私の住んでいますのは諏訪市です。隣町、茅野市にＳ病院があります。友人が2年程前から白血病で入院していたので、時々お見舞いに伺っていました。その友はうた（短歌）をやっていて、ちょっと勝気で、自分は死期が迫っていることを「同情しないでね」と話していました。

私も相手がどんな場合であっても、病人でなくても同情の目で見るのは対等ではないと思うので、同情という言葉はあまり好きではないのです。

そのＳ病院で亡くなった彼女が電話で「あんたに何が分かるんだ！」って言うんです。「分かりますよ」って言ってあげたい、分かるような気がするんですが、何も分からないのです。でも自分の辛さ苦しさを誰にぶっつけるかというと、分かってくれそうな人にぶっつけてくるのだと思って、真っ正面から受け止めて決してひるまないで、最後の最後まで対等なお付き合いをしました。

＊夫の病気と母の死＊

またＳ病院は、主人が倒れて最初に担ぎ込まれ、亡くなるまでお世話になった病院でもあるので、あまり行きたくないところでもありました。

Ｓ病院に主人が入院した時、シビアに「あなたは今こういう状態でたぶん今夜はもちません」と本人にスパッと言ったのです。傍で聞いてまして「え！そんなこと言っていいんですか」って思わず口走ってしまいました。99％助からないというところを「今晩は」「明日朝までは」「この一週間は」「この一ヵ月はもちませんよ」と言われて一年過ぎました。人間の体は意外にもつものだとびっくりしたのと、がっかりしたのと（正直な話、ほんとに不謹慎ですけども・・・）そ

んなことを思いました。

その前に、母を食道癌で亡くしました。とても辛い病気で、どうしたらやわらげられるか、肩代わりできないか思いながら、ひたすら必死に看病しました。

丁度主人の病気や娘の出産と重なって、病人から病人を綱渡りで飛び歩いているようでした。残念ながら母は亡くなりましたが、なんの心残りもなく「ごくろうさまでした」と送れました。

それからしばらくして兄が倒れたのです。

＊兄の病気と立ち直り＊

兄はいつも健康だったので、突然そういう状態（右半身が麻痺）になったことが納得できませんでした。いろいろ手を尽くして、リハビリをする時になって、「ほっといてくれ、僕はこれで人生終わったんだから、静かにいかせてくれ」と言って何も受けいれないのです。腹が立って殴りたい気持ちでしたが、病人の兄ですから何とも仕様がありませんでした。

「あっそう、やっちゃんが、おじちゃんて案外意気地なしなんだって言ってた」と言ったら凄く顔色かえて（やっちゃんは私の息子で、筋ジストロフィーで15歳迄もたないと言われていて、段々色々な機能を無くしていますが、頑張って生きています）

そのやっちゃんのことを出したら、兄もさすがにこたえたようで「やすあきのことを考えたら、俺なんかまだましで、思い直したよ。すまぬ。今になってやすあきに何の優しい言葉もかけてやれなかったことをすごく残念に思うけど、そのぶん頑張れって言われたような気がする」と言って、それからリハビリもするし、食事も摂るようになって3～4ヵ月したら自宅に帰れるようになりました。

＊「半円の闇」の経緯＊

自宅に帰ってからまた閉じ籠もるようになったので、写真に興味をもたせたら、ＮＨＫの写真講座に入って、応募するまでになりました。作品がみごと入選して褒められたことが刺激になって、立ち直ったように思われた時、東京の青梅街道の先に山や谷合い一面がピンクに染まる見事な梅園があって「そこに行きたい」と言うので出かけました。帰りは奥多摩へ抜けて、大菩薩峠から甲府へ下って帰って来たのですが、その途中、奥多摩湖で休憩しようと降りて見たら（「半円の闇」のうたが出来た所です）隧道の半円の闇のあたりに、それは素晴らしい桜があったのです。老木ののびやかな枝の先にわびのようにふた枝ほど隧道の半円の所にさしかかっていたのです。「わぁ綺麗！」と眺めているうちに涙が止まらなくなってしまいました。この涙ってなんなのだろうと思ったら、自分の中にある潜在意識が触発されて涙がとめどなくあふれてしまいました。触発させたものは何だろう、涙の意味は何だろうと思った時、桜の枝と隧道がまるで母や父の語らいのような感じがしたのです。温もりとか、じっーと見ていると声が聞こえてくるような、離れるのを忘れるくらいそこに暫くいました。

その時出来た歌が＜何の変哲もない隧道のところに桜の一枝が揺れている＞とただそれだけの歌だったのですが、京都にいる私の先生のもう一つ上の先生が、私の歌集をまとめたときに「半円の闇」と題名をつけてくださいました。

＊幼かった頃、兄が学徒動員＊

兄が小学校の4年、私が2年の時です。そのころは4年生から学徒動員などで勉強は全然していません。私達は飛行場の滑走路の掃除、石拾い、兵隊さんの食糧調達に動員されて、教科書を開いたことがありません。兄は学徒動員で工場へ行って弾とか危ないものを造っていたようで、戦争が激しくなり、やがて終戦になってしまったので、兄のいいときはなかったようです。

＊父母の出会い、父の戦死＊

母は製糸工場で糸を繰る人達に指導をし、面倒をみてまわる仕事をしていました。

父は大工の棟梁で、工場の建て増しとかで出入りしていて母と知り合ったようです。

そういった時に特高警察の捜査があり、両親は、ちょっとした使い走りが原因で、たまたま検挙されてしまいました。思想的な問題は一度そうなると封建的な村にはいにくいもので、朝鮮へ渡って警察官になったわけです。

父は戦争が始まる少し前から海南島へ飛行場建設という国の方針で、朝鮮の大勢の方達を引き連れて、その建設現場で指揮をとらざるをえなかったのです。1年という約束で行ったのですが、任期が終わったその晩、スパイの攻撃を受けて残念ながら戦死しました。その時の身分は、飛行場建設ということだったので、戦死ではなく、軍属の戦病死でした。それで母はとても大変な思いをして私たちを育ててくれました。

＊激しい戦争、終戦＊

私がいた所は朝鮮のウオンサンで陸軍、海軍、航空隊がある要塞地でした。

そこで戦争が激しくなりました。私は空襲を何回も受けました。「ドカーン」と落ちると人間が飛び上がるぐらい直撃を受けたのを見たことがありますし、爆風で家のガラス窓が全部破れたこともありました。空襲警報でなく、いきなり緊急警報で「防空壕へ入れ」というときは「ドッカン」「ドッカン」落ちているのです。そのような状態のある日、爆撃が無くなって「畳の上で寝かせてもらえるかねぇ」と言ってたら、兄が「高い所に登って海を見てご覧、向こうにアメリカの艦隊が砲塔をこっちにむけてずーといるよ」と言うので、私も高台に登って見ましたら、おみごとというぐらいずーとアメリカ艦隊がいました。帰りに後ろの山に何かちらちら見えるのです。それはロシア軍が参戦してきて、装甲車とか戦車が後ろの山を全部包囲していたのです。

私達はたぶん両方から一斉にやられたら跡形も無く木っ端微塵になってしまうところでした。

そして空襲も、ドカンのひとつも無くなって、大変静かな日がちょっと続いた後の、その日は暑い日でした。天皇陛下のお言葉ですべてが終わりました。

＊抑留される日本人達＊

その静けさの中、凄い音がしたので見ると、物凄い数の日本人達が自分の体より大きなリュックサックを背負い、ひきづるようなザラザラザラというような音をたてて歩いて行きました。それはシベリアへ抑留される人達で、延々と一日半は続きました。よくこんなに沢山の人達がどこから出てきたのだろうと思うくらい、長く感じました。「あっ、あのおじさんだ」「あっ、あの兵隊さんだ」というように顔見知りが行くのです。

＊早く逃げよう＊

すぐに現地の人達の略奪と強姦が始まったのです。賊が入ったら、縁の下から隣へ逃げられるようにしたり、女達は丸坊主にして縁の下に隠れて逃げ歩いていました。いつも危ないとこにいたので、早くそこから逃れたいと横の連絡を取り合っている人達とお金を出し合って、船を買いました。夜密かにその場所に行ったら船が無いのです。

「むこうへ向かう貨物列車にもぐり込ませてあげるからいくらいくらだせ」と言われたり、とにかく逃げたいので何回も騙されました。

日本の子はいい値段で売れたようで、売り飛ばされる寸前を兄の機転で助けられて逃げました。暗くなるのを待って一日7里歩きました。日中は見張りがいるから橋の下とかお宮、山の中に潜んで、セリとか食べて一生懸命歩きました。「ここの坂を降りると38度線に近いのだよ」というところまで来て皆で「よかったね」と言って坂にさしかかると、私達は3家族10何人位で逃げたのに、そういうグループが幾つもあって太鼓の音で追い詰められ、広い道に出てきた時には100人以上になっていました。「もう逃げられない」と思ったその時、山賊の頭に呼ばれて見ると、その人は以前母が窮地を救った人でした。偶然の出来事で助けてもらって、半日位歩いた所が38度線の川で、草むらに隠してあった船に乗りました。

＊命を虫けらあつかい＊

後の船の赤ちゃんが泣きだしたら、船頭さんが櫂で突き落として、さらに喚く母親までも落として、命を虫けらのように扱うのを見ていて、麻痺してしまいました。泣き叫ぶのが聞こえて、警備兵が飛んで来て射撃が始まりました。

＊たすかった＊

そのころ私達は船から降りて、兄が「走れ！」と言うから必死で走りました。「落ち着くところは分かっているんだから走れ」と言われて、それだけで必死に走ってどの位走ったか分からなかったけれど、アメリカ兵に「ご苦労さん」と受け止められ、トラックに乗せてもらって、今のソウルへ着きました。そこで始めて人間らしい食べ物を戴いて、プサンまで輸送され、引き上げ船に乗ることができました。

＊引き上げ船で日本へ帰国＊

上陸した次の日列車に積み込まれ、長野へ向かいま

した。諏訪の駅に着いて親戚に行ったら、「あ、またやっかい者が帰って来た」という顔をされました。日本も大変な時だからしかたないけれど、情けないなあと思いました。

そして母が「今晩はここの家に泊めてもらいなさい」と置いていかれた親戚の家も都合が悪く、兄の後を追って川べりをつたわってかなり歩いて、母のいる所へ帰りました。母は驚いて「もう離さないよ」と。

それから母の頑張りが始まって、何も無いところからなんとか乗り越えてきました。

＊初めて産まれた児が筋ジストロフィー＊

結婚して初めて産まれた児が筋ジストロフィーで「うちの方にはそういう病気は無いからあんたの方だろう」とさんざん嫌がらせをされたので、「ああ、この子連れていっそ死んじゃおうかな」と思い子供を背負って線路を歩きました。調水堰も歩きました。大きな松の木に紐掛けてと思いましたが、娘のことを思うと「あの子一人置いていくのは可哀相だ」。そして、ここまで連れて来てくれた母にも申し訳ない「死ぬわけにはいかない」と思いました。

この子が15歳まで生きられないなら、毎日精一杯この子にいいことをしてやりましょうと思いました。学校にも施設にも入れて貰えなかったので「この子を入れる施設を作ろう」「学校で教えて貰えないなら訪問教育制度も作ろう」と皆に一生懸命声をかけて、溜まり場になりました。

＊息子に「体が不自由、それは個性だよ」＊

最初のころ息子が病気のこと「いやだ」と言っていましたので「あなた体が不自由、どこが不自由ってそれはひとつの個性なんだよ。たまたま目に見えるところだったけど恥ずかしいことないじゃない」と、車椅子がないからベビーカーに乗せて落ちないように縛って近くのデパートまで行きます。「かあちゃんみっともねえよ」みんなが変な目でみるのですが「何かおたくのお子さんと違うところがありますか」とそのくらいの気分で悠々としていました。

＊医療検診に回って20年＊

資金づくりのためにパートに出てせっせと働きました。さらに鈍行で5時間かけて県庁に行き『また来た』といわれながらも通って、補助金を取りつけました。それが今でも続いています。

逆に県のほうから要請を受けて出かけた先で、男の子ふたりで不自由な生活をしているのを見て、本気になってやらなくてはと思い、東京から専門の先生を呼び、信州大学の学生がボランティアでバックアップしてくれたので長野県を2泊3日の医療検診に回るようになりました。それがもうすぐ20年になります。

＊息子が首を切る練習＊

ある時息子がカッターで首を切る練習をしているのです。物凄いショックで血の気がひいて「何やってるの」と、しっかり抱き留めて「だって僕生きてたって何の役にもたたないし、ただ死ぬのを待っているだけだろう、生きてる価値なんかないよ」と言うので、抱きしめたまま「あんたが欲しくて産んだんだからそんなことで死なないでよ」「いいことだってあるから」『いいことなんてない、お母さんだって僕がいなければどんなに楽かわからないだろう」

(その時は施設から帰され、行くところがないので後は家で余生を送りなさいと、15歳ぎりぎりでした)

『みんながあんたのためにと思って生きているのは、何の役にもたたなくなるじゃない。死ぬなんて何時だって出来るんだから全部やって、『おかあさんもういいね』って言い合ってから死んだって遅くないよ』。

「そうか」やっとそこまでいくには毎日どれだけの戦いがあったか分からないです。

19歳まで生きましたが、最後の5年間の成長ぶりは、自分の子供ながら感心しました。

その子がいよいよだめだと言われた時には、ほとんど私の手の中にいて、ちょっとおろすと「痛いよ、苦しいよ」と言うのでほとんど抱いたまま暮らしていました。クリスマスの前の晩「僕、おっかぁの子で良かった、ありがとな」「なあにあんた言ってるのよ、また明日」「ありがとう、さようなら」「おやすみでしょう」まだ私は気がつかないで、抱いたまま寝ていて、ふっと気がついたらこと切れていました。

息子との別れは手の中で挨拶もしました。

へとへとの人生でもうほんとうにボロボロになっていたので、少し自分の体を立て直そうと思って1年経ったところで、今度は主人が、乖離性大動脈瘤破裂寸前で倒れました。

プレイベント　「死の臨床研究会」　9.29（日）

死の臨床研究会の全国大会（第26回年次大会）が2002.11.23/24の両日、高崎音楽センターにて開催されますが、そのプレイベントとして下記のシンポジウムを開催することになりました。

テーマ『もし私が、がんだと言われたとき～どうしたら良いでしょう～』

がんはいつ、だれに襲ってくるか誰にもわかりません。が、「検診」で「再検」と言われたり、検査の結果「疑わしい」と言われ、急に「どうしたらいいだろう？」と悩みが始まります。また、闘病の末、親しい人を亡くしたときは、人知れず「悲嘆に暮れ」、「どうしたらいいか？」と途方に打ちひしがれます。

このたびのシンポジウムでは、こうしたときの「サポート態勢」の現状、必要な「サポートシステム」の構築について、医療に携わる立場、行政の立場、市民患者の立場から考察していきたいと思います。

シンポジスト　斎藤　龍生さん（国立療養所西群馬病院副院長）医療施設サポートの立場から
小笠原一夫さん（ペインクリニック小笠原医院院長）在宅サポートの立場から
小澤　邦壽さん（群馬県環境衛生研究所所長）行政サポートの立場から
安藤　啓子さん（市民）がん患者の立場から
コーディネーター　吉本　明美　（群馬ホスピスケア研究会）
土屋　徳昭　（群馬ホスピスケア研究会）

日時　2002.9.29（日）　午後1時～3時
場所　高崎労使会館ホール　　資料費　500円

群馬ホスピスケア研究会・第26回日本死の臨床研究会現地実行委員会／共催

第26回 日本死の臨床研究会 年次大会（ＩＮ群馬）のご案内

主なプログラム　①特別講演　「ＷＨＯ方式がん疼痛プログラムの歴史的背景と世界規模での普及活動」武田文和
②教育講演 1　「末期がん患者の食べることへの援助」　平野真澄
2　「末期患者のＱＯＬを高めるリハビリテーション」　仲　正宏
3　「緩和ケアと感情労働」　武井麻子
4　「呼吸困難に対する緩和治療のアルゴリズム」　田中桂子
③事例検討10題
④一般演題100題余（ポスター展示しながら発表されます）
⑤シンポジウム　テーマ　「生と死を超えて」　司会／恒藤　暁・藤腹明子
パネラー　小原　信・沼野尚美・種村健二朗・大谷木靖子・患者代表
⑥交流セッション　「ホスピスケア認定看護師の教育と活動」司会／季羽倭文子
パネラー　阿部まゆみ・小松崎香・清水麻美子・安達富美子
⑦特別企画　「詩画からのメッセージ・星野富弘の世界」　出演　星野富弘・柏木哲夫対談　朗読／美咲　蘭
⑧市民セッション　「あなたががんになったとき～ホスピスって何？」　司会／吉本明美・奈良林至
パネラー　山崎章郎・石口房子・土屋徳昭・遺族代表

日　時　2002.11/23・24（高崎えびす講に重なる土曜、日曜）
場　所　音楽センター・シティギャラリー
参加費　全プログラム参加の場合は　会員5,000円、非会員7,000円
なお、プログラム⑦⑧（11/24昼より）のみ参加の場合は1,000円となります。

問い合わせは
大会事務局　〒377-8511　渋川市金井2854　　国立療養所西群馬病院（「死の臨床研究会」群馬大会事務局）
TEL　0279-23-3030　　FAX　0279-23-2740
または　　群馬ホスピスケア研究会事務局　　TELとFAX　027-323-5824（参加申込も受けつけます）
参加申し込み手続きは
〒533-0032　大阪市東淀川区淡路2-9-26　淀川キリスト教病院内　日本死の臨床研究会事務局
TELとFAX　06-6324-6539　　Eメールアドレス　jard@ych.or.jp

2002.5.18（土）

『続・悲しみ、そして愛』

出版記念パーティー

地域に根ざしてこそホスピスケア。その意味で群馬ホスピスケア研究会の役割と活動の意義は大きい。

国立療養所西群馬病院
斉藤龍生さん

祝　電

出版おめでとうございます。研究会のますますのご発展をお祈りいたします。

群馬県立がんセンター
長廻　紘

自分の最期の在り方を合意しながら自分で決める。これは残される者にとっても、重大な問題です。

フリーランスライター
立木寛子さん

本の発送センター
〒379-2152　前橋市
TEL　027-266-6
FAX　027-266-6
Eメール　SUSAN.K
県内、煥乎堂、戸
でも販売していま

東京からわざわざこのパーティーに来たのは、市民活動の後輩として、群馬ホスピスケア研究会がなぜこんなに長く活動を続けてこられたかをこの目で見るためです。

どんぐりの会遺族会
「青空の会」（東京日野市）
中野貞彦さん

継続は力というけれど、市民活動14年間の継続は、そのまま、地域の文化を作ってきました。

ペインクリニック
小笠原医院
小笠原一夫さん

3月に当会で出版した
『続・悲しみ、そして愛』の
記念パーティーが、高崎駅近くの
サンパレスで行われました。
何年ぶりかで再会した同窓生のよ
うに旧交を確かめ合い、話が
はずみました。

市下大島町1311-12
341
881
@olive.zero.ad.jp
田書店、文真堂
す。

看取りシリー

高崎市　渡辺トミ子

経　過

緑の色濃さを増す心地よい季節となりましたのに、私の心は固く、石が心の中に積み重なっているような重い気分でございます。

夫は昨年師走の半ば、高崎市内のある病院で亡くなりました。夫の死自体は運命のなせる業と諦めてはおりますが、なぜか心が晴れないのです。

夫の終末期は、手術の後遺症で思うに任せぬ私の手足にまさる介護を、心込めて支え、お手伝いしてくださった群馬ホスピスケア研究会の櫻井さん、木村さん、清水さんなどのお世話により、それはおそらく亡くなった夫にとっても私にとっても、ほんとうに満足のいくものだったと思っております。このことには、今でも毎日、仏前に手を合わせながら感謝しております。しかし、私の心の中のわだかまってしまったものがあります。それは高齢者への終末期医療のあり方だと考えております。

医療者に感謝

夫は七十歳までは本当に健康に恵まれ、病気らしい病気をすることもなく過ごして参りました。亡くなった病院で九年前、膵臓がんとの診断の末、膵臓全摘出、胃三分の一、脾臓三分の一、他部分摘出という十二時間にも及ぶ大手術を受けました。このとき私は、その仕事の大変さ、献身的な仕事ぶりに驚き、こうまでして患者の命を助ける医師や看護婦さんの皆さんに敬服の念から心よりの感謝をしました。手術後三日間は臨死状態が続き、正直、もうダメかも知れないと思いました。ところが四日目、体の動かない夫が口を開きました。「俺は、よい医者に出会ったので助かるかも知れない」と言ったのです。それからというもの、順調に回復し、二ヶ月ほどして年末には退院するまでになりました。

膵臓を摘出した関係でインシュリンが分泌できなくなり、いわゆる糖尿病の症状になりました。以降、自分で血糖値を測定する方法を教わり、自宅で血糖値管理とインシュリン処置をしました。そして、以前のように家業や町内の仕事をこなすようになりました。食事の摂りかた、運動の量によって、時には低血糖を起こすこともありましたが、その都度ブドウ糖を服用して事なく過ごしておりました。

入院が命取りに・・・

九年間もこうして過ごしてきたというのに、昨年十月、夜中、トイレに起き低血糖のため倒れてしまいました。私は救急車を呼び、手術していただいた病院を指定して運んでいただきました。夜間当直の医師の手当ですぐに気が付きました。本人はことの経過については「全く覚えていない」と、気が付いてから笑いながら申していました。

病室に移され、回診がありましたが、医師は夫をちょっと見ただけで、何やら看護婦に指示するとすぐに病室を出てしまいました。患者の枕元には、「検査中」の札が掛けられたのです。私は、意識も戻ったことだし、これまでの経過を話せば、すぐに退院できるものと思っていたので、意外でした。医師に、これまでの経過が分かるように、夫が測って記録した血糖値の動きを示すメモも持っていったのに、それをお見せする間もなく、また、いつも使っているインシュリンがレギュラータイプであることを言う間もなく、「検査中」になってしまいました。その後、入院中にも拘わらずしばしば低血糖症状を起こすようになりました。

看護婦さんにインシュリンの種類や量を聞き、驚きました。素人の私が考えても、家にいるときより相当多くの量が使われていると思いました。一ヶ月が過ぎ、患者は日に日に体力をなくし、衰えていくのがわかり不安になって看護婦さんに聞きました。返事は、「先生の指示です」の一点張り、それ以上納得のいくようなお返事はありませんでした。

夫の血糖値は200～250で体調が良好なのに、病院では110を基準に150になるとインシュリンを注射していました。あれから一ヶ月も「検査中」の札がかけられているのでどうしてかと問い正すと、看護婦さんはその掛札の紙を目の前でバリバリと破り捨ててしまいました。

その後何日かして夫は、「インシュリンがレギュラーになり、量も減った」と嬉しそうに言いました。このときすでに夫は、寝たきり状態の重病人になっていたのです。

不安が募り、転院を考え、それをそれとなく訴えてみましたが、病院の都合で紹介状も書いてもらえませんでした。また、在宅療養の道も模索し、子供達は家政婦さんやヘルパーさんたちと何度か相談もしたようですが、私の手足の具合が悪いということもあり実現しませんでした。どうしてこんな風になってしまったかを考えると、一つには、手術をした当時の医師が既にこの病院にいなかったということがあげられます。前のカルテが在ったのかなかったのか、それを、後任の医師がきちんと見たのか見なかったのかは分かりませんが、新たな担当医師としては、最初から自分で検査してその上で適切な治療をと考えておられたのでしょうか。それにしても疑問は残りました。

何かに付け、「家に帰りたい・・・」と、

重態の夫はうわごとのように「家に帰りたい」と申しました。私もたまりかねて医師に御願いしますと、「いいですよ」と申されました。しかし、それは亡くなる三日前のことでした。すぐにでもと思っていたのですが、その日は帰れませんでした。翌日、清水さん、木村さんの計らいで、家に受け入れる支度をしていただきました。布団の中には、帰ってきて直ぐに温かい布団に潜り込めるようにと、湯たんぽやカイロなどが敷き詰められ、準備は整いました。しかしこの日も帰れませんでした。「どうしても明日は帰らせてください」と思い切って申しました。

翌日、それは亡くなった日のことです。朝から心待ちに

していましたが、医師の診察がないと「外泊」できないと言うことで、待っていると、午後になってしまい、まだかまだかと落ち着かずに居ると一時を回りました。ところが二時過ぎ、夫の息づかいが荒くなってきました。

数人の看護婦さんと医師が見え、私たちは病室から出されました。胸を切開して、点滴の管を入れる処置をしたことは後で知らされました。痰を取るために鼻からも管が入れられると苦しそうに顔をしかめていました。病室に小型のレントゲン撮影機が運び込まれ、さらに、ストレッチャーでレントゲン室に移動しました。戻ってきたときにはほんとうに苦しそうでした。それから間もなく息を引き取りました。私は、「無駄な延命治療はしないでください」と、前もって言っておくべきだったと思いました。

死の床になった

いつ戻っても良いようにと用意してあった床には遺体がありました。長い間入浴もできずにいたので、遺体を洗ってもらいました。「この仏様は傷口の手当がしてないね」とその方が申しました。胸の切開の後がそのままになっていると言うのです。「なぜきちんとした手当がしてもらえなかったんだ・・・」私は惨めな気持になりました。

葬儀も過ぎ、日が経つにつれ、私の心はストレスで押しつぶされていくようでした。それは直接、私の体調に響いてきました。検査の結果、医師が驚いて家族を呼び事情を聞き、説明するほど、私の状態は悪くなっていました。私は以前、乳ガンの手術を受けていたのです。

石屋さんは、「人生はそんな良いことばかりではないよ。ご主人はあの病院で手術を受けたから八十三歳までも生きられたじゃないですか、不満はあるかも知れないけれど、結局、プラスマイナスゼロなんですよ人生は」と言って慰めてくださいました。

重い心持ちのまま、何気なく読書しているとこんな言葉が目に入りました。「すべての苦しみ、憤り、怒り、さわり、悪意を汝等すべて捨てよ」と。

私は自分自身の弱さに気付かされました。すぐに心が癒え、平安を取り戻すことはできませんが、夫が逝って半年、何事も感謝に変える努力をしなければならないと考えておる今日この頃でございます。

「ばあさん、きょうは　そばに　いてくれ」

清水美代子

秋も深まる昨年11月26日、「入院中の夫の病状が思わしくないので心配してる人がいるから会ってください」と言う、ホス研の仲間からの電話でその病院に出向きました。「寝かきができて痛くてねぇー」と、患者さんはオムツを充てられ淋しそうに言いました。奥さんのお話では、入院十日目あたりにはできはじめたそうです。

「昨日まで高崎の町はえびす講で賑やかだったんだよ」「そうかい、えびす講だったんかい、ばあさん、さんま食いそこねたなぁー」「あと一月でお正月が来るよ、家に帰りたいかい？早く病院から逃げ出そうよ渡辺さん！」「そりゃ、帰りてぇけど、家じゃ面倒見られねぇよ、この体じゃあ。ばあさんも病人だからなあ、だから、ここにいて、家のこと思い出しちゃあ、店にいる気分でいろいろ考げーてるだぁ」。

渡辺さんは長い間、家業の自転車販売・修理業を営んできました。奥さんのトミ子さんは数年前、乳ガンの手術をして手が不自由です。おまけに、膝にも水が溜まって思うように歩けません。このところほとんど口にしなくなった食事だそうですが、この日久しぶりに食欲を見せ、昼食を8分目ほど召し上がりました。

12月1日、「雅子さまに子供が生まれるらしいよ」「テレビつけてくれや、（部屋の）みんなに見せてやってくれや」「自転車の荷付けひもが欲しいと、今日、店にお客が来て、値段が分からないんで持ってってもらったよ、旦那どうしたい？ってその人言ってたよ」「そうかい、悪りーねぇー」と言いながらも、結構嬉しそうな表情を見せました。

12月10日、「飯は食いたかねぇが、水が飲みたくてなぁ、夜、看護婦さんを何度も呼ぶのは悪りーから、自分で飲もうとやってみるんだが、こぼしちまってなあ、情けねえ」。枕元のシーツは番茶で汚れていました。いつものように昼食介助を終え、帰ろうとする奥さんに「ばあさん、きょうはそばに居てくれや」と言いました。いつもと違うとそのとき直感しました。「今日は息子が泊まりに来るからね」。

12月11日、朝から意識が朦朧となっていました。「今日はばあさんが一日そばに居るよ、ばあさんが一番良いだろう、渡辺さん」。目を閉じ、しっかり頷きました。この夫婦は、長年、あまり仲が良いとは言えない夫婦だったそうですが、最期の場面で、奥さんは旦那の手をさすりながら言いました。「悪い女房で済まなかったねぇ」。

ここは急患の多い病院ということもあり、死を間近にして、周りから一般の人が見ると苦痛を伴うような医療行為がなされました。ましてや、耳が遠く、動作も緩慢になった高齢者にとって、これらの医療行為やその進捗状況をいちいち理解するのは、気の毒だけれど無理なことではないかと思いました。

病院で死ぬということは、現実の日本の医療ではこれがある種、一般的な光景でもあるのかと思います。だから、なおさら、いつでもどこでもホスピスケアが必要なのだと思います。

最期に夫婦の和解の場面がありました。

霊安室に安置された直後、若い看護婦さんがどこからか一輪の白菊を手折ってきて渡辺さんの胸の上に手向けてくださいました。長年、ホスピスケアの運動をしてきた看護婦としては、何もできないことに恥ずかしさが心をよぎりました。

市民ホスピスセミナー

2002.5.26（日）

（野外交流会）

昨年から始まった屋外版ホスピスセミナー、今年は赤城自然園でのハイキングに決まりました。

5月初旬からぐずついていた天候もさわやかに晴れ、20名（内、車いす1名）が参加しました。

自然園は赤城山西南山麓の標高600～700mに広がる森林をなるべく自然のままにして整備した約120ヘクタール（約36万坪）の森林公園です。

赤城の大気に抱かれ　リフレッシュ・パワーアップ

水道やトイレが整備されている休憩広場で昼食後は全員で自己紹介を兼ねながら語り合いの時を持ち、その後はしゃくなげの広場で色とりどりの花を堪能しました。そして、新緑から明日へ生きるパワーを貰った集いになりました。

到着後、ボランティアのガイドから主に植物の説明を受けながら約2時間園内を歩き、ふだん何気なく見過ごしている野の草、可憐な花などをあらためて見直しました。また、車いすの参加者は電気自動車で園内を案内していただき大喜びしていました。

第10回 日本ホスピス・在宅ケア研究会 全国大会 in 九州

2002年9月7日（土）
8日（日）

●メインテーマ●

～ホスピスは何処へ…　歴史を見直し、未来を探そう～

特別講演

◆宮嶋　真一郎さん（共働学舎代表）
「喜びのあるところにこそホスピスあり」

◆フィリップ・クロード神父（予定）（旭ヶ岡の家代表）

◆対談　鎌田　實さん
内藤　いづみさん

◆シンポジウム「これでいいのか、日本のホスピス」

◆市民セッション「考えよう告知」　他多数の演題あり

フリマ 続けてます！

「こすもすの家」実現のため基金活動としてフリーマーケットへの取り組みを続けています。

毎月第3日曜日

高崎サヤモールにて

11月のゑびす講に向け、みなさま、物品の提供と当日のご購入に協力して下さい。

問い合わせは事務局へ　TEL 027-323-5824

活き活き、「分かち合いの会」

1997年9月から死別体験者の「分かち合いの会」を休まず続けてきた。一時期参加される方がゼロのこともあったが今では順調に回り始めた。

毎回10人前後の方が参加され、その内およそ半数は新たに参加される方という構成である。配偶者、子供、親などの死別対象は様々だが、共通するのはこれらの人々の中に何か癒されずに残っている「悲嘆」が存在するということだ。同時に忘れがたい何かがあるということだ。

本会は、ホスピスケアにとって重要な要素である死別による「遺族のケア」を、社会的に支えることを目標にこの活動を始めた。

いつ、どこで？

日時　毎月第2日曜日、午後2時から4時まで
場所　新前橋の**群馬県社会福祉総合センター会議室**
（2階・201号室が多い）

どのように？

参加はどなたでも自由です。予約も不要です。
何度参加されても自由です。

「会」にはお世話役をするスタッフがいます。その人を司会として、参加者の自己紹介から始めます。ただし、お名前を言わなくてもかまいません。

どんなひとが？

「会」には、配偶者、子供、親などとの死別を体験した方々が集まっています。他者のお話を聞きたい、自分の体験を聞いてもらいたい。などの人がいます。

どうしたら？

お話をしたい人はご自分の体験をお話下さい。聞くだけでもかまいません。発言を強制されることはありません。この会には「先生」がいて指導したり、アドバイスしたり、教えることはしません。また、医師がいて治療することも、宗教家がいて法を説いたり、導いたり、説教することもありません。ただ、他者の言葉に耳を傾け、自らが語り、そのなかから自分に必要なものを得ること、生きるヒントをみつけること、互いに癒されることをめざしています。

あとで個人的に話したい……

このような場合はその場でお申し出くださるか、事務局宛にお電話ください。ご都合にあわせて機会をもうけます。

☆プライバシー・秘密は厳守されます…

参加されたこと、「会」で話された内容などすべてプライバシーは守られます。

寄付 ありがとうございます

(2002.2～6)

力石宮子、鴻上千恵美、星野ヒサ、佐々木とみえ、見城みち子、あさを社、須田民子、剣持政幸、関アツ子（書籍）、木村敬子（物品）、山口淑子（物品）、深野八重子（物品）、小平享（物品）、藤井京世（物品）

会計報告（2001/4/1～2002/3/31）			
収入の部		支出の部	
前期繰越金	136,622	通信費	215,136
寄付金	634,561	印刷費	409,061
入会金	4,000	事務用品	6,468
補助金(高崎社協)	26,800	事業経費	179,805
事業収入	9,000	書籍費	17,640
書籍販売	42,184	次期繰越金	25,057
計	853,167	計	853,167

財政ピンチです!! 支援をお願いいたします。

各位　日頃より本会の活動に対しご理解とご支援頂ありがとうございます。本会の活動は会員や支援者の皆さんの寄付により成り立っています。しかし昨今、上記会計報告でもおわかりのように、本会の活動は財政面から見ると、一時期の1/2以下になり、繰越金も底をついてきました。実は今回、会報の発行が遅れたのも、「印刷費用が無い」ためです。

一度の会報発行には十数万円を要します。今日の世情を考えると、あまりご無理を申し上げ難いのですが、会の活動を継続するためには会員各位に御願いする他はありません。
事情をご斟酌の上、同封の振り込み用紙にてご協力を賜れれば幸いです。

群馬ホスピスケア研究会代表　土屋徳昭

★ 群馬ホスピス研究会通常活動資金のための寄付
郵便振替　番号／００５６０―４―５２８７
名称／群馬ホスピスケア研究会宛

★ 看取りの家（こすもすの家）建設基金のための寄付
郵便振替　番号／００１７０―９―４７９４５
名称／群馬ホスピスケア研究会
「建設基金」

編集後記

石の上にも3年というが、図鑑と首っ引きでなくても姿や鳴き声から鳥の種類がほぼ分かるようになってきた。それにSuさんに同行するとふだん会えないような鳥も姿を見せるような気がすると野鳥の会員に言われたりすると嬉しくなってくる。緑が濃くなってくると北国に渡ったり、山のほうに登る鳥が多く里山に残る種類は少なくなるが、死別の悲しみをどれほど彼等に癒して貰ったか。自然の力の偉大さをあらためて感ずると共にもっともっと自然を大切にしなければと思う。(Su)

お花見情報の新聞記事に誘われて、春から秋間梅林、宮城村の千本桜、足利フラワーパークの藤棚とつつじ、敷島公園のばら園、赤城白樺牧場のれんげつつじ等々出かけて来ました。どこもすごく混んでいて、お花より人々に圧倒されることが多かったです。でもホス研で皆と出かけた赤城自然公園は、新緑に包まれて鳥の声を聞きながら散策できて楽しかったです。職員の方々のマナーも良くて、癒しの時間を過ごせました。
土、日の限られた月しか開園してないので、いつでも行けないのが残念です。(Ta)

「まがり道に来ちゃったね」。近道しようとして入った道が、工事中や細道のため、行きつ戻りつしているとき、助手席のチャイルドシートに乗っていた二歳半の孫の言葉である。「ウッッ」。私は返す言葉もなくただ反省した。ときどきやってしまう人生の「まがり道」、「急がばまわれ」のように、正道を堂々と歩くことが大事だと孫に諭された。(No)

転勤。この歳での突然の転勤で、3月からの数ヶ月は身体的にも精神的にも非常にストレスを受けました。

会報の発行が遅れたことも気になりながら、今頃になってしまって本当に申し訳けないと思います。今年も早半年が過ぎ、今梅雨の最中です。サッカーの世界選手権が始まり、日本は出場2回目にして決勝トーナメント進出を果たしました。今、日本中、老いも若きも湧きに湧いています。

一方、健康保険法改正など、国の動きにも慌ただしいものがあります。この会報がお手元に届くころは、梅雨も明け、サッカーのチャンピオンも